



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば

年間第 30 主日 B 年 (2024 年 10 月 27 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 31 章 7—9 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 5 章 1—6 節

福音朗読：マルコによる福音書 10 章 46—52 節

第一朗読は『エレミヤ書』から採られています。預言者エレミヤはバビロン捕囚（紀元前 586 年）頃まで活動しました。『エレミヤ書』30—33 章では、捕囚の民が故郷へ帰ってくることと、イスラエル民族の再興が約束されます。それで、この箇所は「慰めの書」と呼ばれてきました。30 章ではイスラエル（北王国）とユダ（南王国）が再び栄えることが約束されます。31 章では、イスラエルを復興する残りの者の帰還と、イスラエルと結ぶ新しい契約が約束されています。

8 節に注目してください。北の国とは、かつて北王国（イスラエル）が捕囚となったアッシリア、そして南王国（ユダ）が捕囚となっているバビロンの方角を指します。「地の果て」も同様に、民が離散している場所を指します。かつて強大な敵が侵略してきた方向から、今、喜びの行進が始まり、こちらをめざして帰還してくるのです。しかし、戻ってくる人々の群れは弱い者の群れです。「身ごもっている女」「臨月の女」とは、か弱く、保護を必要とする者のイメージです。それは同時に、新しいいのちを宿し生み出す祝福のイメージでもあります。「会衆」（カーハル）は「招集を受けて集められた集会、会衆、群れ」や「組織化された共同体」の意味があります。もっとも多く用いられるのは宗教的な目的での「集い」です。ギリシア語訳聖書ではこのことばを「エックレーシア」と訳しています。このギリシア語が後に「教会」を意味するようになりました。

第二朗読では、この数週間、『ヘブライ人への手紙』が読まれています。朗読の冒頭、1 節を見てみましょう。旧約の祭司はアロンの系図につながる者だけでした。その中から大祭司が一人選ばれ、彼だけが神殿の最も奥にある至聖所に入ることができました。大祭司は年に一度、贖罪の日に罪のゆるしを受けるために動物の血を携えて至聖所に入ったのです。

大祭司の主な務めは「供え物やいけにえを献げる」ことでした。「供え物」とは、あらゆる種類の犠牲を表します。しかし、「供え物といけにえ」と表現されると、「供え物」は屠りを伴わない献げ物

一切、「いけにえ」は屠りを伴う献げ物一切を表します。

続いて5節と6節を見てください。ここでは、献げ物をする、思いやることができる、神から召されたという大祭司の任務を、イエスさまにあてはめていきます。1章5節で引用した詩編の箇所(2編7節)を用いて、大祭司イエスは神からその身分を受けたことが証明されます。そして6節では、さらに別な詩編を引用して(110編4節)、「メルキゼデクと同じような司祭」であることが証明されます。イエスさまが神から大祭司に任命されたのは、ただ一度だけ登場するメルキゼデク(創14章18節)と同じように、ただ一度現れた永遠の大祭司となったのです。しかもメルキゼデクは王でもありましたから、イエスさまもまた王となったのです。

福音朗読を見てみましょう。「まだ悟らないのか」(8章17-21節)というイエスさまの呼びかけに応じて、盲人が開眼する物語(8章22-26節と10章46-52節)に挟まれるようにして、三つの受難告知が続きます。その度に、お弟子さんたちの誤解とイエスさまによる彼らへの教育が続いてきました。これらは道の途中での出来事でした。今日の福音朗読の後、『マタイによる福音書』ではイエスさまによる奇跡物語もなくなり、イエスさまに従う物語もなくなります。イエスさまとお弟子さんたち一行はエルサレムへの道を進むのです。

まず、47節を見てください。「ダビデの子」。メシアはダビデの子孫から生まれると信じられていました(イザ11章1節、エレ23章5-6節、エゼ34章23-24節)。また、初代教会もイエスさまがダビデの末裔であると信じていました(マタ1章1節、ロマ1章3節参照)。この言葉は『マルコによる福音書』では、ここで初めて登場します。そして、ダビデの子であるイエスさまは、この後、王として神殿を清め(11章15-17節)、律法学者として教え、論争し(11章18節、27-33節、12章33-44節)、預言者として世の終わりを預言(13章1-37節)するのです。

つぎに、47節と48節に見られる「叫んで」に注目しましょう。ギリシア語は「クラゾー」です。もともとは「大声で意味不明の言葉を叫ぶ、わめく」の意味です。汚れた霊が叫ぶ(マコ5章5節)、湖上を歩くイエスさまを見て、弟子たちも恐怖から叫ぶ(マタ14章26節)。しかし、明瞭なことばを叫ぶ意味でも使われます。悪霊が「かまわないでくれ、あなたは神の子」(マコ3章11節、5章7節)とは違って、盲人は「憐れんでください」と叫びます(マコ9章24節参照)。エルサレムに入城したイエスさまに対して「ダビデの子にホサナ」と叫んだ群衆(マコ11章9節)は、程なくして十字架の前で、「十字架につけろ」と叫びます(マコ15章13節)。

続いて49節は47-48節と対の関係にあります。「叫び」、「叫び続ける」盲人と、「呼びなさい」とイエスさまが命じ、盲人を「呼んで」、「お呼びだ」と伝えた人々。つまり、叫ぶ盲人と呼び出すイエスさまの関わりが見えてきます。周囲にいる人々は、その両者を取り持つ役割を担います。

52節の「なお道を進まれる」は直訳すると、「その道で」となります。ですから、今日の朗読箇所全体は「その道で」で始まり、終わっています。